

主 題：相応しい主への捧げ物

聖書箇所：詩篇 160篇12-14節

「ありがたいなあ」、福音を信じて救われた人が口にしたことばです。主の恵みを知ったときに思わず出たことばでしょう。主の恵みのすばらしさを実感されている皆さんは、一様に同じ思いを抱くはずです。今日、皆さんにご紹介する一人の人物は、この「ありがたい」という思いをもって生きた人物です。彼は主に対して「ありがたい」と常に思っただけでなく、「ありがたい」を実際に生きた人です。私たちはこの人の歩みから大切なことを学びます。この人は詩篇116篇を書いた著者です。ご覧ください。詩篇116篇、今日、特に私たちが注目したいのは12-14節です。

:12 主が、ことごとく私に良くしてくださったことについて、私は【主】に何を返ししようか。

:13 私は救いの杯をかかげ、【主】の御名を呼び求めよう。

:14 私は、自分の誓いを【主】に果たそう。ああ、御民すべてのいる所で。

A. 主の恵みを経験した人 1-8節

この人は「主の恵みを経験した人」でした。116篇を見ると、様々な出来事が記されています。彼はどのようなことを経験したのか？今から見ていきますが、まず、3節を見ると、彼がこの当時抱えていた大変な問題を記しています。3節には「死の綱が私を取り巻き、よみの恐怖が私を襲い、私は苦しみと悲しみの中にあつた。」とあります。いったい、彼は何を言わんとしていたのでしょうか？そのことを理解するために詩篇18篇をご覧ください。この3節とよく似た表現が書かれています。18：4-6「:4 死の綱は私を取り巻き、滅びの川は、私を恐れさせた。:5 よみの綱は私を取り囲み、死のわなは私に立ち向かった。:6 私は苦しみの中に【主】を呼び求め、助けを求めてわが神に叫んだ。…」、非常によく似ていることに皆さん気付かれるでしょう。

著者が116：3で言わんとしたことは、彼は死を覚悟するほどの問題を抱えていたということです。「死の綱が私を取り巻き、」とあります。まさに、猟師が綱を張って獲物を獲得しようとしている姿で、彼自身が死に捕らえられるかのような状態にあると言うのです。死が自分に迫っているということをこのように表現したのです。ですから、3節の続きには「よみの恐怖が私を襲い、」とあります。「よみ」とは「墓、死」を意味することばです。彼は死に対する恐れを経験し、それゆえに「苦しみと悲しみの中」を歩んでいたのです。死の恐怖が彼から希望を奪っていました。まさに、絶望に近い状態、そのような日々を過ごしていた、そのことをここで私たちに教えるのです。大変な問題があつたのです。

そのような中で彼が何をしたのか？4節「そのとき、私は【主】の御名を呼び求めた。「【主】よ。どうか私のいのちを助け出してください。」、主に助けを求めるのです。すると、主の答えがありました。8節「まことに、あなたは私のたましいを死から、私の目を涙から、私の足をつまずきから、救い出されました。」、これが主の答えでした。彼は助け出されたのです。そこで、彼は主を賛美します。1-2節をご覧ください。「:1 私は主を愛する。【主】は私の声、私の願いを聞いてくださるから。:2 主は、私に耳を傾けられるので、私は生きるかぎり主を呼び求めよう。」と。主は私の祈りを聞いてくださる、これは信仰者にとって大きな希望です。私たちが祈ったことを必ずかなえるという約束はありません。「主のみこころが成される」こと、主の最善が成されることを約束されたのです。それが最善だと私たちは知っています。全知全能のすべてを造られた創造主なる神は、あなたの祈りを聞いてくださるのです。

ですから、大変な苦しみの中にあつて神に助けを求めたとき神は助けてくださった。そして、彼は神を称えます。彼は7節でこう言います。「私のたましいよ。おまえの全きいこいに戻れ。【主】はおまえに、良くしてくださったからだ。」と、そこに行き着くのです。「全きいこい」とは「休息、くつろげる場所」ということです。主がそのような時を与えてくださったのです。どんな状況にあつてもどのようなことを経験していようと、私たちが主のところに助けを求めるなら主がそれを私たちに与えてくださるのです。皆さんはそれを経験されているはずです。マタイ11：28に「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」とある通りです。ヘブル書4：3にも「信じた私たちは安息に入るのです。「わたしは、怒りをもって誓ったように、決して彼らをわたしの安息に入らせない。」と神が言われたとおりです。みわざは創世の初めから、もう終わっているのです。」と書かれています。本当の休息を与えることができるのは神だけです。旧約と新約を問わず、すべての者に教えられているのは「神とはそういうお方だ」ということです。

この著者もそのことに気付き改めて確信を持つのです。「主は確かに生きておられる。そして、祈りに耳を傾けあわれみをもってみこころを為してください。そういうお方なのだ。」という確信を改めて

彼は抱くのです。これが彼自身が経験したことです。このような主の恵みを彼は実際に経験したのです。

B. 主の恵みに報いようとした人 12-14節

その恵みを経験した彼が何をしたのか？この主の恵みに何とか報いようとするのです。言い方を変えるなら、主の恩恵に対して、主の為してくださったすばらしい恵みのみわざに対して「何とかお返しをしたい」という願いを抱くのです。それが今日のテキストである12-14節に記されていることです。この著者は神に対する「ありがたい」という思いを、それが彼の心を満たしていたのですが、彼はそれを実際の行動に現そうとします。「私は【主】に何をお返ししようか。」と自問するのです。もちろん、主の恵みにふさわしく報いることは不完全な私たちには不可能だということは明白です。私たちは不完全であるゆえに、神の前に完全なことを為すことはできません。神が成された完全なわざにふさわしい私たちのわざなど有り得ません。私たちが何をしたとしてもそれは不完全です。

しかし、この思いを私たちが持ち続けることが大切です。この思いをしっかりと持っていた著者は、「三つの行動」に出ていきます。神への感謝が具体的な形となって現れたのです。

1. 感謝をもって主を誉め称えた 13-14節

13-14節「:13 私は救いの杯をかかげ、【主】の御名を呼び求めよう。:14 私は、自分の誓いを【主】に果たそう。ああ、御民すべてのいる所で。」

・私は救いの杯をかかげ : 彼がまずしたことは「感謝をもって主を誉め称える」ことでした。神からいただいた恵みをしっかりと覚えるときに私ができることはこの神を誉め称えることだと言うのです。

感謝をもって神を崇め続けていくこと、それが彼が行ったことです。「私は救いの杯をかかげ、」と、主からいただいた救いという祝福に対する喜びと感謝を現わしているのです。神の恵みに対して彼はその恵みに感謝しよう、恵みをいただいた喜びを現わそうと、主が成してくださった救いのみわざを忘れないで、その主を称え続けているのです。その様子がここに記されています。

・【主】の御名を呼び求めよう : これは「神を称えること」です。彼は神からいただいた救いという祝福を喜びながら感謝をささげていましたが、同時に、神への称賛をささげ続けているのです。詩篇86:12-13に「:12 わが神、主よ。私は心を尽くしてあなたに感謝し、とこしえまでも、あなたの御名をあげめましょう。:13 それは、あなたの恵みが私に対して大きく、あなたが私のたましいを、よみの深みから救い出してくださったからです。」とあります。すべての箇所を開けることはできませんが、信仰の勇者たちは同じことをします。彼らは神の恵みを覚えたときにそれをただ感謝するだけでなく、その神を心から崇め続けるのです。その神を称え続けるのです。

パウロは新約の時代において、テサロニケのクリスチャンたちが大変な迫害の中にありながら、主を信頼し続けて信仰を守り通した様子を知って、大きな喜びに満たされます。そのときに彼はこう言っています。Iテサロニケ3:9「私たちの神の御前にあって、あなたがたのことで喜んでいる私たちのこのすべての喜びのために、神にどんな感謝をささげたらよいでしょう。」、神の恵みを覚えたときに、みな「神に何をもってお返しすればいいのか？神に私の感謝をどのように現わせばいいのか？」と考えます。私たちが神に感謝をささげること、感謝をもって神を崇め続けることは非常に大切なことです。

聖書を見ると、「神の恵みを覚えて感謝をした人」と「そうでなかった人たち」のことが数多く記されています。

・感謝をもって主を誉め称えた人の事例 : ツアラアト、昔はらい病と訳されていましたが、差別用語ということで今では「ツアラアト」とことばを使っています。10人のツアラアトを患っていた人たち、彼らのいやしのことがルカの福音書17:12-19に書かれています。「:12 ある村に入ると、十人のツアラアトに冒された人がイエスに出会った。彼らは遠く離れた所に立って、」、なぜなら、彼らは祭司によって「汚れている」と宣言されたので、普通の人と交わることができなかつたからです。ですから、「:13 声を張り上げて、「イエスさま、先生。どうぞあわれんでください」と言った。:14 イエスはこれを見て言われた。「行きなさい。そして自分を祭司に見せなさい。」、人々との交わりを回復するためには祭司によって「きよい」と宣言されることが必要だったので。「彼らは行く途中できよめられた。」と、問題はここからです。「:15 そのうちのひとり、自分のいやされたことがわかると、大声で神をほめたたえながら引き返して来て、:16 イエスの足もとにひれ伏して感謝した。」、彼は祭司のところに行く前に、イエスのところに戻って来たのです。「彼はサマリヤ人であった。」と続いています。ということは、彼以外の9人はユダヤ人だったのでしょう。「:17 そこでイエスは言われた。「十人きよめられたのではないか。九人はどこにいるのか。:18 神をあげめるために戻って来た者は、この外国人のほかには、だれもいないのか。」、イエスは「神をあげめるために戻って来た」と言われました。サマリヤ人がイエスの許に戻って来て、イエスの足元にひれ伏して感謝しました。イエスはご自分のことを「神をあげめる」と、自分を崇めるた

めに戻って来たのは彼だけなのか？と、ご自分が神であることを明確に話しておられます。この後イエスはこのように言われました。「:19 それからその人に言われた。「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰が、あなたを直したのです。」、これは病のことではありません。病は10人ともいやされました。この人だけ罪の赦しを

いただいたのです。他の9人は病をいやしていただいたが、この記事を見ると、罪の赦しを得なかった。しかし、このサマリヤ人は「あなたの信仰が、あなたを直したのです。」と、信仰によって、たましいの救いを受けたのです。こうして、この人はイエスの前に、その恵みをいただいたときに感謝をしたのです。しかも、形をもって…。

・すばらしい恵みをいただきながら感謝をしなかった人の実例 : この人たちは聖書に数多く見ることが出来ます。先に見た9人もそうですが、ユダの王であったヒゼキヤという人物、皆さんもよく憶えておられるでしょう。彼はすばらしい人物です。今から約2700年以上前のユダの王です。彼の父であったアハズ王はユダに偶像崇拜を持ち込みました。でも、ヒゼキヤ王はそれらを完全に払拭するのです。また同時に、彼は多くの富と名声を得ていました。そして、数々のすばらしい業績も上げていました。みことばに記されている通りです。Ⅱ歴代誌32:27-29「:27 さて、ヒゼキヤは、富と誉れに非常に恵まれた。彼は銀、金、宝石、バルサム油、盾、すべての尊い器を納める宝物倉、:28 穀物、新しいぶどう酒、油の収穫のための倉庫、および、すべての家畜のそれぞれの小屋、群れの小屋を造った。:29 彼は町々を建て、羊や牛の家畜もおびたしいものであった。神が、非常に多くの財産を彼に与えられたからである。:30 このヒゼキヤこそ、ギホンの上流の水の源をふさいで、これをダビデの町の西側に向けて、まっすぐに流した人である。こうして、ヒゼキヤはそのすべての仕事をみごとに成し遂げた。」、最も特筆すべきことは、恒常的に飲料水を獲得するために、ギホンの泉からシロアムの池まで、これは大体540m位ありますが、地下水路を開発したことです。それまではギホンの泉からの水は地上を流れていました。敵が攻めて来て敵がその水を断つことによってイスラエルを困らせることができたのです。ですから、ヒゼキヤは地下に水を流したのです。今でもその水路は残っています。前回、私たちのイスラエル旅行の折にもそこを歩きました。

ですから、すばらしい働きをしたすばらしい王でした。ところが、ある時ヒゼキヤは病気になって死にかかっていた。Ⅱ列王記20:1-6「:1 そのころ、ヒゼキヤは病気になって死にかかっていた。そこへ、アモツの子、預言者イザヤが来て、彼に言った。「【主】はこう仰せられます。『あなたの家を整理せよ。あなたは死ぬ。直らない。』」:2 そこでヒゼキヤは顔を壁に向けて、【主】に祈って、言った。:3 「ああ、【主】よ。どうか思い出してください。私が、まことを尽くし、全き心をもって、あなたの御前に歩み、あなたがよいと見られることを行ってきたことを。」こうして、ヒゼキヤは大声で泣いた。:4 イザヤがまだ中庭を出ないうちに、次のような【主】のことばが彼にあった。:5 「引き返して、わたしの民の君主ヒゼキヤに告げよ。あなたの父ダビデの神、【主】は、こう仰せられる。『わたしはあなたの祈りを聞いた。あなたの涙も見た。見よ。わたしはあなたをいやす。三日目には、あなたは【主】の宮に上る。:6 わたしは、あなたの寿命にもう十五年を加えよう。わたしはアッシリヤの王の手から、あなたとこの町を救い出し、わたしのために、また、わたしのしもべダビデのためにこの町を守る。』」、ヒゼキヤは主にいやしを求めます。病気で死にかかっていたヒゼキヤに対して、神は寿命を15年加えようと言われました。このようなすばらしい祝福に与ったのです。

今度はⅡ歴代誌32:25を見てください。「ところが、ヒゼキヤは、自分に与えられた恵みにしたがって報いようとせず、かえってその心を高ぶらせた。そこで、彼の上に、また、ユダとエルサレムの上に御怒りが下った。」、神からすばらしい恵みをいただいていたが、悲しいことに、彼は神に感謝をしなかったのです。主が成してくださったその「恵みにしたがって報いようとせず、かえってその心を高ぶらせた。」とあります。

このような例はみことばの中に数多く見ます。「感謝を忘れることは罪」だということです。また、「感謝を現わさないこと」も罪です。詩篇116篇の著者は、ただ感謝をしただけではなかった。実際に、この後見ていきますが、生き方をもってその感謝を現わしているのです。

感謝が大切だということを見ました。もう一度、詩篇116篇を見ると、「感謝をささげる理由」が著者によって記されています。彼はなぜ感謝を神にささげるのか？

・感謝をささげる理由 :

1) 主から恵みをいただいたから

12節に「主が、ことごとく私に良くしてくださったことについて、私は【主】に何をお返ししようか。」と書かれています。「ことごとく」とは「すべてにおいて」ということです。ですから、著者は「私への主からのすべての恩恵に対して何をお返しすればいいのでしょうか」と、このように言っているのです。

ですから、神を覚えて神に感謝をささげる理由は、自分に与えられた神からの恩恵を覚えるからです。これはクリスチャンなら当然のことです。あのダビデ王は同じように、主の恵みを覚えて感謝をささげています。

・ダビデ : 詩篇 103 : 2に「わがたましいよ。【主】をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。」とあります。彼はなぜこのように言ったのか？神を誉め称えるその理由を言っています。「良くしてくださったこと」と、それが何か？3-5節を見てください。四つ書かれています。「:3 主は、あなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、:4 あなたのいのちを穴から贖い、あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、:5 あなたの一生を良いもので満たされる。」、

・すべての咎を赦し = 罪の赦しのことです。神が常に赦しをくださる。

・すべての病をいやし = 肉体的ないやしをくださる。

・あなたのいのちを穴から贖い = 死から免れること、死からの解放、救いのことです。

・恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、あなたの一生を良いもので満たされる = 祝福であなただけを満たしてく下さるということです。

これらのことはすべて主が為されたわざです。だから、ダビデは「主の良くしてくださったことを何一つ忘れ」なかったのです。共通していることは、みな神がしてくださった恵みのみわざを覚え続けていたことです。どんなすばらしい祝福をくださったのか？そのことを覚えていたのです。

・レビ人 : 「契約の箱」というのがあります。呼び方はいろいろあります。「神の箱」「主の箱」など…。実は、契約の箱が敵によって奪われました。ダビデがそれを取り戻すのです。そして、ダビデは取り戻した箱をエルサレムのあるべきところに戻そうとします。そのときに、ダビデはその契約の箱がエルサレムに入って来た時に、レビ人の中からある人たちを選びます。その契約の箱の前で仕えるため任命するのです。

そのことはI歴代誌16章に書かれています。16:4「それから、レビ人の中のある者たちを、【主】の箱の前で仕えさせ、イスラエルの神、【主】を覚えて感謝し、ほめたたえるようにした。」と。ダビデは契約の箱がやっとエルサレムに戻って来たので、その箱の前で仕えるレビ人を選んだのです。彼がしたことがここに三つ書かれています。(1) いつも主を覚えた (2) 神に感謝をささげた (3) 神を誉め称えた。これがレビ人たちの務めなのです。

今まで私たちが見て来たことを思い出してください。それが116篇の著者であろうとダビデであろうと、だれであってもみな同じことをしています。神の恵みを覚えたときに彼らはその神に対して感謝をささげ、この神を心から誉め称えるのです。レビ人たちも同じことをしています。こうして神を称えるのです。こうして神に感謝を現わすのです。

イエスが弟子たちと摂られた最後の食事、一般的には「最後の晩餐」と呼ばれています。確かに、十字架に架かる前の最後の夕食であったことは間違いありませんが、そのような表現は聖書には出て来ません。この食事のことを聖書は何と言っているか？これは「過越の食事」です。マタイの福音書26:17~、マルコ14:12~、ルカ22:7~に書かれています。よく知っていることですが、思い出してください。イスラエルの民にとってこの「過越の祭り」は非常に重要でした。彼らはそこで食事を摂ります。彼らは、イスラエルの民に対して神が成された偉大なみわざを想起するのです。

どんなみわざを神がなされたのか？エジプトの地において奴隷であったイスラエルを神は解放してくださったのです。そして、約束の地に導いてくださった。その道中において、神はあわれみを示されました。人々が神の前に罪を犯したとき神はそれを赦してくださった。また、そこにさばきもありました。このような主のみわざを彼らが思い出して神に感謝をささげたのです。この最後の過越の食事のときに、イエスはこれまでになさらなかったことを初めてここで言うのです。ルカ22章をご覧ください。過越の食事をしているときにイエスは何を為されたのか？「:19 それから、パンを取り、感謝をささげてから、裂いて、弟子たちに与えて言われた。「これは、あなたがたのために与える、わたしのからだです。わたしを覚えてこれを行いなさい。」:20 食事の後、杯も同じようにして言われた。「この杯は、あなたがたのために流されるわたしの血による新しい契約です。」、これは聖餐式です。本来は、この過越の食事は神がエジプトで奴隷であったイスラエルの民を解放してくださった、その後、約束の地に導かれる、その神のすばらしい恵みを覚えて感謝するときです。そのときにイエスは、この後ご自分が十字架に架かるということを話されます。そして、この十字架を覚え続けるように、十字架に感謝をするようにと言われます。イエスが地上にいて最後に祝われた過越の食事が「最初の聖餐式」だったのです。

今も話したように、過越の祭りを祝った者たちはこの食事のときに、過去に成された神の恵みを覚えたのです。奴隷であったイスラエルの民がそこから解放されたことを覚えて神に感謝したのです。私たち、今の新約の私たちは、罪の奴隷であったところから神によって解放されました。それを覚えて感謝するのです。あなたはどのように感謝しておられるでしょうか？問題は、過越の祭りを守ること、その

食事を守ること、聖餐式を守ること、それが目的ではありません。主が何を為してくださったか？その恵みを覚えることです。私たちはいつも神がどんなことをしてくださったのか？それを覚え続けることです。それを覚えるなら私たちはその神に感謝をするし、その神を誉め称えながら生きていきます。

非常に興味深いことは、イエスと弟子たちはこの過越の食事の後ゲッセマネへと向かいますが、そのときに彼らが歌ったのが今見ているこの詩篇 116 篇です。食事を始める前には詩篇 113 篇と 114 篇を歌いました。食事が終わった後は 115 篇から 118 篇を歌ったのです。想像できますか？皆さん、描けますか？イエスはこうして愛する者たちに対してこれからあなたがたは、旧約の時代ではエジプトからの脱出を覚えて感謝しました。もちろん、それは神のみわざです。でも、もっと大切なことは、罪の奴隷から解放されたことを感謝することだと言われたのです。

ルカ 22 : 19 には「…わたしを覚えてこれを行いなさい。」とあります。それを私たちはしているのです。繰り返しますが、聖餐式をすることに意義があるわけではありません。聖餐式を通して私たちは、本来なら日々覚えなければならぬ神の恵みを覚えて感謝するのです。それが目的だったのです。私たちが自分に問わなければならないのは「私は本当に恵みに対して感謝しているかどうか？」です。

2) 主であられるから

なぜ、感謝をささげるのか？ 116 : 5-6 をご覧ください。「:5【主】は情け深く、正しい。まことに、私たちの神はあわれみ深い。:6【主】はわきまのない者を守られる。」と、ここに著者が確かに主を知っていたことを見ることができます。ここには私たちの神の属性が書かれているからです。神とはどういうお方なのかが書かれています。

- ・情け深い = 罪を赦してくださる方です。その恵みに私たちは与ったのです。
- ・正しい = 旧約とか神の約束のすべてを必ず守るお方ということです。神は言われたことを必ず守るのです。
- ・あわれみ深い = 優しい、また、子どもたちの限界を知っているということです。私たちが神の前にどのような存在か？どれ程小さく罪深いかを神はご存じです。同じ詩篇 10

3 :

13-14 に「:13 父がその子をあわれむように、【主】は、ご自分を恐れる者をあわれまれる。:14 主は、私たちの成り立ちを知り、私たちがちりにすぎないことを心に留めておられる。」とある通りです。

- ・守り主 = 「わきまのない者を守られる。」と、この「わきまのない」とは「信仰において幼い者たち」のことです。神はすべての者たちを守ってくださるのです。出エジプト 15 : 2 「主は、私の力であり、ほめ歌である。主は、私の救いとなられた。この方こそ、わが神。私はこの方をほめたたえる。私の父の神。この方を私はあがめる。」

このことを著者は告白しているのです。確かに、これが彼の信仰の支えであったことが 10 節に書かれています。116 : 10 「私は大いに悩んだ」と言ったときも、私は信じた。」、見て来たように、著者はいろいろな苦しみを経験していました。死に直面するような…、死に対する恐れがあり、希望を失いかけていました。しかし、彼には主への信頼がありました。「私は信じた。」とあるように、そのような中でも彼は神を信頼しながら前に進んで行ったのです。

私たちにも言えます。いろんなことによって心が騒ぐことがある。ときにはそれによって私たちの中から希望が消えてしまうような、そういうことを経験するかもしれません。でも、その中であって私たちはみことばにしっかり立つのです。神はこのようなお方であり、こういうことを約束してくださったと。その神の約束が、そして、神への信頼が私たちを前へ進めていくのです。まさに、この著者はそのような人物でありそのように歩んでいました。ですから、今、私たちが見て来たことは、主の恵みをいただいたただけでなく、その恵みに何とか報いようとしたことです。

2. 感謝をもって主に服従した 9 節

彼は感謝をもって主を称え続けましたが、二つ目の行動が 9 節に出ています。彼は感謝をもって主に従って行こうとしました。主に対する服従です。「私は、生ける者の地で、【主】の御前を歩き進もう。」と。ここで彼は主に対して忠実に歩み続けていくことを記しているのです。神はこんなにすばらしい恵みをくださった、私に何ができるのか？そのときに神が言われていることに従って行こうとするのです。これが彼の選択でした。

皆さんもよくご存じのことですが、サウル王がした大きな失敗の一つは、神の命令に服従しなかったことです。アマレク人を聖別しなさいと言われたのに、彼は人間的な思いからいけにえに役立つ家畜を残しました。そのときに主が預言者サムエルを通して言ったこと、Iサムエル 15 : 22 「するとサムエルは言った。「主は【主】の御声に聞き従うことほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。」、神が何を求

めておられるのか？神が何を喜ばれるのか？いけにえではない。神が喜ばれるのは「神に聞き従うこと」です。神が言われたことに従って行くこと、それが神が喜ばれることです。

でも、皆さん、あなたも一生懸命神に従って行こうとされています。でも、注意しなければならないことがあります。そのあなたの従順が心からのものでなければなりません。

* 服従における注意事項

ホセア書6：6に「わたしは誠実を喜ぶが、いけにえは喜ばない。全焼のいけにえより、むしろ神を知ることとを喜ぶ。」と記されています。この「誠実」ということばと「神を知る」ということ、この二つが神に喜ばれることだと言います。では、どういう意味か？

1) 誠実 = 揺るがない神への愛です。いろんなことがあっても揺るぐことのない神に対する確固たる愛です。何があっても神を愛し続けるというその愛です。

2) 神を知ること = 神についての知識を積むことではないことは明らかです。神をより正確にまた個人的に知ることです。つまり、神の偉大さ、その恵みの大きさを私たちが個人的に知ることによって、それが私たちの生き方に影響を与えるのです。

この二つのことばが並行しているのは、神を愛する者に必ず起こることだからです。その人には神をより深く知っていきたいという思いが起こります。愛しているからです。そして、神のことを知るほどに、このお方に従っていくことがどれ程すばらしいことかを知るのです。そして、私たちはこの方に従って行こうとします。ですから、神を愛する人は神に対する従順な生活を経験することになります。思い出してください。旧約の時代も新約の時代も、最も大切な戒めは「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、【主】を愛しなさい。」(申命記6：5)です。つまり、この世のすべてのものより、そして、あなた自身よりも神を愛するか？と、そのことが問われているのです。

ですから、これまで自分の好きに生きて来た私たちが、今度は私たちが造られた真の神のそのみこころに沿って生きていこうとするのです。神を愛することによって、この神にもっと喜ばれるように、この神をもっと喜ばせるように、この神が望んでおられるように生きていこうとするのです。ですから、神への愛は当然、神への従順をもたらします。そのように歩んでいる人はもっと神のことを知りたいと願います。なぜなら、もっと神を喜ばせたいからです。

ですから、このような歩みは確実に神に対する忠実な歩みを生み出していきます。今、ホセア書のことばを見ましたが、神はいけにえ、全焼のいけにえを喜ばないと言われたわけではありません。「むしろ」とあります。これは「それよりも」という意味です。つまり、何をしているかよりも、どんな心でしているのか、それが神の関心だということです。私たちはどちらかというと「何をするか」に関心があります。こういうことをして来たとか、このことをやっているとか…。みことばが私たちに教えることは、あなたがやっていることを神は本当に喜んでおられるか？です。そのためには自分の心を正直に探ってみることが必要です。神の栄光が現わされているのか、それとも、自己満足で終わっているのかです。あなたの為す奉仕もあなたのささげ物もあなたの信仰も、信仰者としての人生そのものが神の前に価値があるかどうかです。「私はこれだけのことをやって来た。こういうことをして来た。」と言っても、神がそれを喜んでおられるかどうかです。神がその働きの上に価値を見出すかどうかです。私たちはみな神のためにするはずで、その神が喜んでおられないならその歩みは全く無駄だと思いませんか？

だから、みことばに沿わなければならないのです。私たちの勝手な思いではだめなのです。それは自己満足です。神を喜ばせること、この詩篇の著者は私たちに「主が、ことごとく私に良くしてくださったことについて、私は主に何をお返ししようか。」、それは感謝をもって主を誉め称え続けることと、そして同時に、感謝をもって私の神に従い続けていきたいと、そのことを言うのです。

3. 感謝をもって主を証した 14、17-19節

三つ目は、「感謝をもって主を証した、主を宣べ伝えた」ということです。14節に「私は、自分の誓いを【主】に果たそう。…」とあります。恐らく、何か誓いを立てたのでしょう。旧約の人たちはそのことを頻繁にしました。死に直面したときに何かの誓いを立てた、それを今果たそうと言うのです。何を言っているのか？それは、今見て来たように、人々の前で主に感謝をささげると言うことです。そして、彼は実際にそれを行います。それによって誓いを果たそう、「ああ、御民すべてのいる所で。」と言います。だから、自分一人で神に感謝しているのではなく、彼は神への感謝を人々のいる前でしたいと、それを誓ってそれを実践すると言うのです。

この証はそこにいる多くの人々にとってすばらしいものとなります。人々の前で主への感謝を現わすことで、なぜ、この人が感謝をしているのか？その理由を知ることになります。神はこんなにすばらしい恵みを私にくださったと。同時に、それによって感謝に値する神がおられることを人々は知るので、すばらしい証です。私たちも同じことをします。イエスがどんなにすばらしいお方か…、この方が

どんなにすばらしいみわざを成してくださったのか？この方が私たちのすべての罪を完全に取り去ってくださった、罪の赦しを与えてくださった。この方が生きておられ私たちとともにいてくださり、私たちの必要を与え続けてくださる。そして、用意されたすばらしい永遠の祝福に私たちを招いてくださる。この神を私たちも人々に証するのです。

神の恵みをいただいた著者は、このすばらしい恵みを人々の前で感謝したのです。詩篇105：1に「【主】に感謝して、御名を呼び求めよ。そのみわざを国々の民の中に知らせよ。」とあります。また、詩篇22：22にも「私は、御名を私の兄弟たちに語り告げ、会衆の中で、あなたを賛美しましょう。」と、みな同じです。神から恵みをいただいた者はそれを人々に伝えようとします。

今日、私たちはこの詩篇116篇を記したひとりの信仰者のその信仰を見て来ました。神からすばらしい祝福をいただいた。その彼がしたことは、感謝をもって主を誉め称え続けることでした。彼は感謝をもって主に従い続けていました。彼は感謝をもって主を証し続けました。彼の感謝はここだけで終わっていません。その感謝を生き方をもって現しました。彼はこのような歩みをもって、このような行動をもって心から神に感謝していることを示したのです。まさに彼が「主が、ことごとく私に良くしてくださったことについて、私は【主】に何をお返ししようか。」と言った通り、このような行動をもって、確かに不完全であるけれど、私の感謝を現わそうとしたのです。確かに、私たちは何をしてもそれは神の前に不完全です。では、何もするべきではないのか？そうではありません。願わくは、私たちひとり一人の心にしっかりと刻んでおきたいのは12節のことばです。「主が、ことごとく私に良くしてくださったことについて、私は【主】に何をお返ししようか。」、この思いを私たちは決して忘れることがあってはならないのです。なぜなら、この思いは私たちの生き方全般に影響を及ぼすことだからです。

私たちは今年創立70周年を迎えました。多くの人は過去を振り返り、これまでに成されて来た様々な働きを懐かしむかもしれません。しかし、私たちが本当に考えなければいけないことは、過去のことではなく現在のことです。また、未来のことです。大切なことは、過去にどんな働きをして来たかではなく、今、何をしているかです。クリスチャンである私たちは神の地上での働きに対して「これまで！」と言われるまで、みな元気で、信仰生活にリタイアはない、「いや、私は昔に比べて…」と、神はご存じです。それでも神は私たちを用いようとしてこの日をくださったのです。

もし、私たちが過去を振り返るなら、それは「神の恵みを覚えるため」です。どんなことを神はしてくださったのか、それを覚えるのです。私たちは決して私たちがして来た不完全な働きを誇るために過去を振り返るものではありません。私たちは失敗だらけでした。悲しいことに、私たちがして来たことは神の栄光を汚すようなことでした。でも今、こうしてあるのは神の恵みです。私たちが何かをしたからではありません。神の恵みによって私たちはこうしてこの場にいるのです。私たちが覚えなければならぬのは「神の恵み」です。称えなければいけないのは「神の恵み」です。

だから、私たちはこの詩篇の著者が言うように、神がしてくださったすべてのことに私はいったい何をもってお返しすればいいのかと、この願いをもって生きる人は神の恵みを覚えているからです。この著者の歩み、彼が生きた人生、願わくは、それがあなたの模範となることを願います。

70周年を迎えた今、あなたはかつてと同じように、神の恵みを「ありがたい」と感謝しておられるでしょうか？私の祈りは「主が、ことごとく私に良くしてくださったことについて、私は【主】に何をお返ししようか。」で、この思いがあなたの心にしっかりと刻まれていて、そして、あなたの従順な生活を日々後押ししてくれることです。主の恵みを覚えて、ことばだけでなく、与えられた一日一日、私たちの行い、行動をもって「神さま、私はあなたに感謝します」と感謝を現わすことです。たとえ、不完全でも心から為すならそれを神は喜んでくださる。このようにして地上の生活を終えていくのです。